

## ●本の紹介●

佐々木雅子

## 「ひいらぎの垣根をこえて—ハンセン病療養所の女たち」

(明石書店、2003年5月発行、本体価格1800円)



著者の佐々木雅子さんは、神戸学生青年センターの母体である日本キリスト教団で働いておられた方だ。教団の在日韓国・朝鮮人・日韓連帯特別委員会の仕事ものされていた。彼女は2001年6月、退職前に取材でハンセン病療養所・多摩全生園を初めて訪ねた。それは「ハンセン病国賠訴訟」熊本裁判で政府が控訴を断念して原告勝訴が確定したすぐ後のことだったが、「その時以来、この訪問だけではとても済まないという気持ちが生まれてきた。遅きに失しつた感があるが、全生園に住む人々のお話をもっと聞きたかった」とあとがきに書かれている。

本書は、全生園で生活している3名の女性の聞き書きである。「裁判で胸のつかえがとれた森清子さん」「スラウェシからの留学生森元恵美子さん」それに「在日コリアンア5年安王述さん」の3名である。それぞれに、私には想像を絶するような体験が語られている。

書名のて枝（ひいらぎ）は全生園のある森を囲む生垣として植えられている。枝は、

クリスマスの飾り付けによく利用されている刺のある木だ。以前、刺のない枝を見せてもらってびっくりしたことがあるが、枝は老木になると刺がなくなるのだ。老木になると刺が消えるのかと妙に感心したのだが、全生園の枝は、まだ刺があるのだろうと想像したりしているが……。

私は本書で初めて知ったが、ハンセン病の療養所に入るときには「宗教を選ばされる」のである。信教の自由には宗教をもたないことももちろん含まれるが、ここでは葬式のために「選ばれる」が、それは一生療養所を出ることができないことを前提としているのである。「ライ予防法では、退所規程がないといったん入所したら生涯を療養所で送ることが強制されていた」のである。安さんは一度教会に行ったことがあるということでキリスト教を選んだが後に受洗してクリスチヤンになっている。

安王述さんは、1928年、3歳のとき



入所前の安王述さん。療養所に行くことが決まって、写真館で撮影した

に母親に連れられて日本に来た。大阪西淀川で「貧乏生活」をしていたが、父がハンセン病に発病して、岡山の邑久光明園に強制入院させられるとき、父の世話をするために共に入所する。安さん自身は、発病はしていたが強制入院させられる状況ではなかったようだが、父の世話をするため入所を「志願」したという。1941年6月26日のことだった。大阪駅まで電車だとすぐなのに、ハンセン病患者は電車に乗ることができずにリヤカーに乗せてもらい1時間半もかかっていったという。大阪駅からは、窓を閉めきった特別の車輌に乗せられて移動した。

邑久光明園には私も一度行ったことがある。兵庫の外国人保護者会主催の長島愛生園訪問プログラムに参加させてもらったときのことだ。愛生園での交流の合間にタクシーでとなりの邑久光明園に旧知の崔南龍さんをたずねたのである。私は崔さんと指紋押捺拒否運動の関係で知りあつたが、もっとも崔さんは運動に関係されていたが、ハンセン病患者は指紋を押すこともできない方もおられ、ご自身は押捺義務を免除されていたのである。崔さんは一時体調をくずされていたが、最近『猫を喰らう話』を出版され、その出版記念会を神戸学生青年センターで開いていただきたときに再会することができた。

安王述さんは、光明園で結婚され出産が許されない状況のもとで妊娠9カ月までになったときに、夫の死を契機として、堕胎を余儀なくされた。安さんの夫は、くじに当選してようやく20名分しかないという新薬「セファランチン」の投与を受けたが、1年半後になくなつた。医者とけんかして途中で薬をやめた2名以外は全員死亡したというが、ほんとに驚くべき事実である。

「9カ月の子どもを婦長さんが、それで

もどうにか手を入れて引っぱりだした。子どもは生きていたよ。手足をバタバタ動かし泣きよつた。婦長さんはピンセットやらはさみやら、のせてきた四角い金属製の医療用のお盆に子どもを寝かせて『男の子ですよ』と見せてくれたよ。(略)『もういいでしょう』と言って、わたしの目の前で子どもを裏返しに伏せてしまったのである。安さんは、国賠訴訟の法廷での証言に躊躇があったがことを「二度とこういう時代をつくってはいけない」からと証言したのである。

また、光明園での赤痢の話も衝撃的で、1947, 8年ごろに流行し、1000人ぐらいいた入所者のうち300名も亡くなつたという。その後、安さんは再婚して多摩全生園に移ったがその夫もまた失っている。

安さんは「わたしらは何をしたのか。人を殺したのでもなく、人のものを盗んだわけでもない。なぜこんなことをせなならん。だれがこういうことをさせたのか、國だよ。一度このように(隔離、偏見を)植えつけられたらなかなかおらへんよ。なおしてほしいけどわたしらはもう(この世には)おれへんね」と語っている。

ハンセン病の事実を知らせ苦難を強いられた患者の生の声を伝える貴重な本が加えられたことに著者の佐々木さんに感謝したいと思う。

(井上)

